体験版(Black69cross/Nagisa)

片倉小十郎受け短篇集　拾壱　から抜粋

「最高の宝物だ」
元親の告白、それを最後に彼の唇は小十郎を楽しませることだけに集中し始めた。
接吻、愛撫――そして……
「ンッ……元親、そんな激しく舌を」
「ヒクついている。俺の舌に感じている」
「ああ、感じている。だから焦らすな」
「焦らしたおまえの姿をもっとみていたい。小十郎――綺麗だ」
秘所を必要以上に舐められ、恥ずかしさと快楽の狭間を漂う小十郎。
腰をくねり、元親のモノを入れろと求めるが、元親はまだこの状況を楽しみたいという。
すれ違う感情。
それもまた悦び。
焦らされゆっくり愛される、それも悦びのひとつ。
「元親――」

（「雪桜」元親×小十郎より）

片倉小十郎受け短篇集　拾弐　から抜粋

「いや、なんかさ……吊るされたあんた見たら、ムラッときちゃって」
ムラッときちゃって？
いつの間にか縄は小十郎の手首に巻きつき、吊るされている。
重さが両手首にかかり、痛みが尋常ではない。
「おい、冗談ならこの辺でやめておけ」
「冗談で吊るす趣味は、ない」
「だったら……今は演習中だ」
「そうだな、演習中だな。俺様の得意技、知ってる？」
佐助がそう言うと、辺りが霧に包まれていく。
真上にいるはずの佐助すら、肉眼で捉えにくいほど、濃い霧。
その霧の中からヌッと手が出る。
出た手は躊躇なく、小十郎の股間へ。
「くっ……」
ゾクッとする。
嫌悪だけが小十郎の身体を駆け巡る。
しかし、そんな小十郎を弄ぶように、忍び寄る手は大胆にも小十郎のナニを掴み、勃たせるよう手を動かし始める。
嫌悪が次第に気持ち良さに流れていく、それを止めることが出来ない。
「んっ、はぁ……」

（「緑樹」猿飛佐助×片倉小十郎より）

片倉小十郎受け短篇集　拾六　から抜粋

吊るされた小十郎の身体からは血が滲み、着衣はもうその用途をなしていない。
裸体で吊るされていると言っても過言ではない状態の中、辛うじて残っているのは政宗への忠誠心。
ここで光秀を引き寄せ時間を稼げれば、少しは立て直す機会がある。
最悪、奥州まで戻るという手も。
どうかあの場から、あの危機から脱していて欲しいと願う小十郎だった。
そんな小十郎の心を読み取ったかのように、光秀の口が語る。
「偵察の者からの報告によれば、あの場から伊達政宗は生きて抜け出したそうですよ」
思わず安堵した感情が顔に出る。
それが光秀には気に入らなかったのか、しかし――と、言葉を続けた。

（「一寸先の闇」明智光秀×片倉小十郎より）

体験版のご試読ありがとうございます。
続きないし他の作品は本作にて続けてお読み頂ければ幸いです。

二〇一一年八月　　Ｎａｇｉｓａ